

沖縄県青年海外協力隊を支援する会会報

(題字：故末次一郎氏)

はいむるぶし

(沖縄県八重山地方の方言で南十字星の意)

901-2102 沖縄県浦添市前田1143-1
国際協力事業団沖縄国際センター内
TEL 098-876-6000(代)
沖縄県青年海外協力隊を支援する会
発行責任者：事務局長 東江賢次

『はいむるぶし』再刊によせて

これまでにない日本経済の不況下にあつて、ODAに
対する国民の考え方も以前に増して厳しくなつてい
中、いわゆる「顔の見える援助」の代表格として、青年
海外協力隊の存在がクローズ・アップされています。

お蔭様をもちまして、青年海外協力隊派遣事業三十六
年目を迎える国際ボランティア年の今年七月、派遣実績
も二万二千人を超え、本県出身の隊員も今年度中に二〇
〇名に達する運びとなりました。

その一方で、青年海外協力隊や日系社会青年ボラン
ティアの応募者数が、ここ数年、頭打ちになつており、
JICAとしても、広報戦略を練り直し、これまで
の地道な募集活動に加えて、教員現職参加制度や企業等
のグループ派遣制度を整備し、その活用を進めていると
ころです。

JICAでは平成十二年度に国内機関別の「中期事業
展望」を策定し、定期的な見直しをいくつか国内事業の



展開を図ることになりました。これを受けて当センター
としましては、本県の持つ経験や地域特性を最大限に活
用しながら、地域保健医療、IT関連事業、国際理解教
育支援等を最重点項目として位置付け、これまで以上に
県関係各機関やNGO、そして企業の皆様とも連携を図
りながら国際協力事業を推進し、これらを通じて微力な
がら本県の国際化にも貢献してまいりたいと考えており
ます。

その一例としまして、先島を含む県内各地において、
亜熱帯農業（果樹、野菜、家畜）や村落開発分野の青年
海外協力隊候補者に対する技術補完研修（派遣前訓練開
始前に数カ月程度の期間で実施）が行われており、隊員
の専門知識・技術レベルの向上に一役かっていたいただい
ていることは特筆に値します。

このような時期に『はいむるぶし』の再刊が決定した
ことは私どもにとりましても、また派遣中の県出身隊
員、帰国隊員、そしてこれから派遣される隊員候補者に
とりましても、たいへん喜ばしい、心強いニュースとな
りました。関係者を代表いたしまして、本誌の発行に携
わるすべての方々に敬意を表し、お礼を申し上げたいと
思います。

最後に、青年海外協力隊派遣事業ならびに沖縄県青年
海外協力隊を支援する会の益々の発展に向けて、会員各
位をはじめ皆様のご支援、ご協力を心からお願い申し上
げる次第です。

国際協力事業団沖縄国際センター所長
沖縄県青年海外協力隊を支援する会顧問

佐々木 豊

はいむるぶし

末次先生からの賜りもの

— 沖縄に注いだご恩を忘れてはならない —

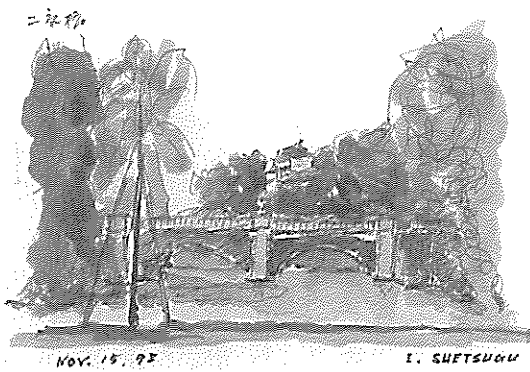


昭和五十四年光栄にも末次一郎沖縄事務所長を拝命(?)し、温情あふるる薫陶をいただいて二十余年、数多くの物心両面に亘るご指導ご支援を賜りました。ここに、謹んで心からお礼を述べさせていただきます。

先生の生き方に大きな影響を受けていた私は、先生でさえも自分の住宅を持たないものであるから自分ごとき者が住宅を持つのはどうも、と躊躇していた。その話が先生の耳に届いたらしく「私は家を持たない主義なんだ。できることであれば家を持ったほうがよい」との話であった。私は、昭和六十四年にローンを組み自宅を購入した。先生はわざわざ拙宅にお運びいただきお祝いを頂戴したものである。帰京後、電話があり「新築記念品を色々考えたが、掛け軸を送ることにした。床の間の高さを調べてくれ」とのこと。数日後、墨痕鮮やかな逞しい筆致で「百聞不如一見 百見不如一考 百考不如一行」の直筆の掛け軸が届き感激の極みであった。そのほかにも、沖縄復帰十周年記念に「うしろ姿」私どもの結婚記念に「般若心経」の色紙を頂戴し、それぞれ家宝として掲げ、生きる指針としている。

百聞不如一見
百見不如一考
百考不如一行

川満茂雄



平成13年7月27日沖縄県青年会館で行われた、故末次一郎氏の記帳及び香典受付の様

ところで、先生がご逝去されて、多くの諸先生方、先輩諸氏が「国土、巨星、国民的英雄」とその生き方を表現されておられますが、正にその通りだとおもいます。国のため、戦後処理、青年運動、安全保障、沖縄、北方問題、青少年健全育成等多くの重要な役割や、日本外交史に大きな足跡を刻みながら、自らを語らず、清貧で栄誉や利権にとらわれず常に何が正しいかを探求され、ひょうひょうとしておられた先生の偉大さは、語っても語り尽くせるものではありません。

特に我が県民は、本土復帰の実現をはじめ、沖縄でのサミット開催実現、県政運営への適切な御助言、本土・沖縄豆記者交歓事業の推進等これまで沖縄に注いだご恩と深い愛情を永久に忘れてはならないでしょう。

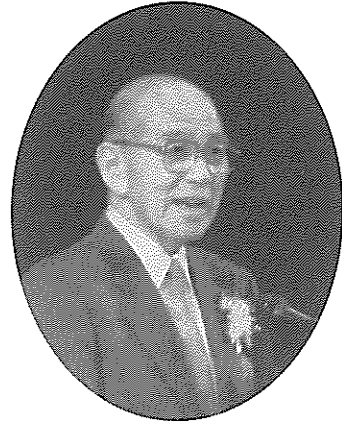
それにしても、もうあの温容なご尊顔を拝することができず、何とも寂しく悲しい限りである。合掌。

協力隊を支援する会運営委員
(沖縄県広報課長)

川満茂雄

はいむるぶし

末次一郎先生の思いで



故 末次一郎先生

先生の訃報を聞いたのは七月十二日だった。まさに巨大なガジュマルの樹がドドドッと倒れたという思いだった。

先生に初めてお逢いしたのは復帰の年の昭和四十七年のことである。それは三十年前の青年海外

協力隊訓練中であつた。著名な先生方の講義が続く中で、先生の話しは群を抜いて説得力があつたことを覚えている。訓練中に沖縄は祖国復帰をはたし、晴れて日本の一県として第一歩を踏み出した。忘れもしない昭和四十七年五月十五日である。現地沖縄と東京で同時に記念式典が開催されたが、私は幸運にも佐藤栄作総理大臣から天皇・皇后両陛下をお招きして開催される東京での式典への招待状をいただき参加する榮譽を得た。これも末次先生のいきな取り計らいであつた。

協力隊員としてインドに滞在中、確か昭和四十九年のことだったと記憶しているが、先生はソ連からの帰国の途中ニューデリーに立ち寄られたことがある。幸運にも私は先生から声がかかり、宿泊先のホテルを訪ねる機会があつた。そこで先生と小野田さんは陸軍中野学校の同期であることを初めて知り、小野田さんの救出に至る経緯を細かく聞かされ、時が過ぎるのも忘れお話を伺いしたのを昨日のように覚えていて。先生はフリーピンで発見された当時の小野田さんの生の写真を何枚か持参していた。そんな縁があつて、昭和天皇が崩御なされる直前に、幸運にも私はブラジルで小野田さんと逢う機会がおとずれるのである。

帰国後は仕事の傍ら協力隊OB会の役員としてお手伝いをするようになったが、ある日、今は亡き瑞慶覧長仁氏のお供で那覇空

港へ末次先生をお迎えに行く機会があつた。

末次先生は亡くなるまで煙草を手放さなかつたが、私も当時は煙草をたしなんでいた。で、先生をお迎えし立ったまま三人で雑談をしている時、こともあるうに私は何かの拍子に先生の手の甲に煙草の火をくつつけてしまったのである。しかしそこはやはり武士である。「アッチ」とも何とも言わずただ「ジロツ」と眼光鋭く睨まれただけであつた。私はうるたえてただすみませんを繰り返すのみであつた(以来、私は煙草を止めました)。

本会設立も末次先生の肝入りで、平成五年頃、磯間文彰先生を中心にその態勢を整えていったのであるが、その間、末次先生は現知事の稲嶺恵一氏に白羽の矢をたて会長就任の内諾を取り付けていたのである。そのお蔭で平成六年に末次先生をお迎えし、設立総会を開催することができたのである。以来、回を重ね今年第八回の総会を開催することができたが、先生は忙しい日程の中でこれまで一度も欠かすことなく本会の総会には出席いただいた。今年も六月に定期総会を開催したが、先生の元気な顔を拝見し、貴重な講話を拝聴したばかりである。また、小紙を発行するにあたり、題字の「はいむるぶし」は先生に揮毫を依頼したが、素晴らしい書をいただいた。今となつてはほんとに貴重な財産である。

北方領土の返還や沖縄の基地問題等の重要な課題が山積するなか逝去された末次先生の胸中を思う時、残された我々は更なる努力をしなければならぬ。

心から先生のご冥福をお祈りいたします。

協力隊を支援する会運営委員

平川 宗隆



木費の會長ら(左から)青嶺會講堂、解放軍事務局長、無事隊協力、事件末次一郎先生、撃故、館を囲む(青年大使を写真、ベル盛重)

はいむるぶし

小さなハートプロジェクト資金への協力を

小さなハートプロジェクトは、協力隊員が途上国の人々の幸せを願い、勤務時間外に行う様々なボランティア活動を(社)育てる会が支援する事業です。

国際援助活動は、市民の善意が援助を必要としている人々に届いているのか分りにくいという声をよく耳にしますが、この事業は、個々の協力隊員の要請に応じて、国際協力事業団現地事務所を通して、直接資金支援しているので、確実に実施されています。

これまで、沖縄県協力隊を支援する会は、①非行少女更生職業訓練施設の開設(タンザニア)②孤児施設の補修(ケニア)③山岳村落への水道建設(タイ)④①の施設の拡張⑤小学校学童機の整備(ケニア)へと総額一四〇万円の支援を行ってきました。

今回、ボリビアで看護婦として活動している渡久山妙子隊員から栄養失調児回復センター調理室の整備について三十万円の申請されているところが、これまで積み立ててある小さなハートプロジェクト資金では不足が生じています。

つきましては、関係者の皆さんの募金への協力をお願いします。

振込先 郵便局 口座番号 0176013159503

加入者名 沖縄県青年海外協力隊を支援する会

払込料金 加入者負担

なお、募金は随時受け付けていますが、今回については、十月末日までを目処にお願いいたします。

「空手着ありがとう」タンザニアから協力隊にお礼

アフリカ・タンザニアの青年海外協力隊の要請で、昨年七月に沖縄から贈られた空手着四十五着を受け取った同国警察学校から、このほどお礼状が届いた。発送を仲介した県青年海外協力隊を支援する会が報告した。

空手着は、モシ警察学校の空手訓練に使われている。空手着を提供した守礼堂にあてた、タンザニア警察監長官名のお礼状には「この協力が将来さまざまな形で花開くと確信し、いつまでも大事にしていく」と感謝の言葉がつづられている。

青年海外協力隊を支援する会の儀間文彰副会長は「沖縄の善意によって、伝統の空手がアフリカに根付くことは県民として誇らしい。この寄贈は両国の友好関係にも役立つ」と話した。

(平成十三年八月二十五日沖縄タイムス(夕))

任期を終えた隊員ら県に帰国報告

稲嶺恵一沖縄県知事は知事に就任する以前から、本会会長として活躍されているが、出納長の要職にある嘉数昇明氏も本会設立当初からの会員であり、本会の良き理解者の一人でもある。県の三役のうち知事と出納長の二人が会員であるという全国でも異例の支援する会である。そのような中で八月二十三日付の琉球新報と同二十四日付の沖縄タイムスに掲載されていた記事を紹介する。

活動の様子を出納長に報告 青年海外協力隊

青年海外協力隊の活動を終えた県出身の五人が二十二日、帰国報告で県庁に嘉数昇明出納長を訪ねた。現地の人たちとともに生活しながら、国際協力の第一線で汗を流した活動の様子をそれぞれ報告した。

二年間の任務を終え帰国したのは東江宗典さん(グアテマラ、土木設計)、古庄清宏さん(ニカラグア、青少年活動)、玉城直美さん(ヨルダン、青少年活動)、長浜哲人さん(モンゴル、文化人類学)、富本常夫さん(マラウイ、農業指導)の五人。

東江さんはグアテマラの衣装を自ら着て紹介。「ウチナンチュは顔が似ているから、現地の人によく間違えられた。家族のように付き合ってもらい、人の温かさを感じることができた。良い経験になった」と話した。

(平成十三年八月二十三日琉球新報)

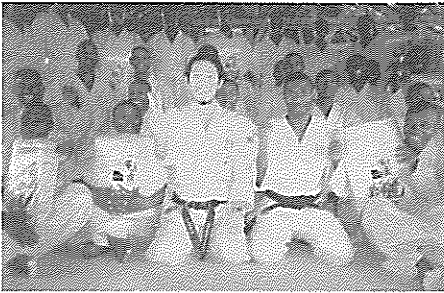
海外協力に熱弁振るう

二十二日に青年海外協力隊の帰国報告を受けた嘉数昇明出納長は、隊員の話聞いた後、自らのエピソードを披露した。「大学一年のころ、アジア十三カ国を一年かけて放浪した。ケネディ大統領が発足させた平和部隊に出会い、他国の発展に貢献することの大切さを痛感した。皆さんのOB会には私もぜひ呼んで」と、若い隊員に劣らぬほどの思い入れをアピール。一方で「協力隊を支援する会会長の知事も、この役職だけは続けている」と、東京出張で対応できなかった知事のフォローもしつかり。

(平成十三年八月二十四日沖縄タイムス)

編集後記

・本会事務局長の東江氏は県農林水産部林務課という忙しい所での勤務のかたわら、事務局長との二足の草鞋(わらじ)を履いている。
 ・この忙しさを少しでもお手伝いしたいと思ひ、「はいむるぶし」の再刊を思いついた。
 ・本会生みの親であり、育ての親でもある末次一郎氏の他界は残念でならない。
 ・氏の意志を継いで今後も支援する会を後押ししていきたい(MH)。



新しい空手着に喜ぶ訓練生と隊員=タンザニア・モシ警察学校(支援する会提供)